

広島県立美術館

研究紀要

第26号

広島県立美術館所蔵南蛮漆器書見台についての調査報告

— 東京国立博物館所蔵南蛮漆器書見台CT調査結果との比較を通じて —

..... 福田 浩子・岡地 智子・小林 公治

安藤真理子・鳥越 俊行・宮田 将寛 1(54)

江戸時代の縮景園を描いた画家たちについて 隅川 明宏 54(1)

2 0 2 3



口絵1 広島県立美術館所蔵南蛮漆器「草花蒔絵螺鈿書見台」表面(修復後)



口絵2 口絵1書見台背面(修復後)



口絵6 口絵1書見台の畳んだ状態(修復後)



口絵7 口絵1書見台の畳んだ状態(収蔵時、修復前)



口絵3 口絵1書見台表面(収蔵時、修復前)



口絵4 口絵1書見台背面(収蔵時、修復前)



口絵5 保存修理に伴うテスト手板



口絵8 IHS七宝蒔絵螺鈿書見台(東京国立博物館蔵)

広島県立美術館所蔵南蛮漆器書見台についての調査報告

— 東京国立博物館所蔵南蛮漆器書見台CT調査結果との比較を通じて —

福田浩子・岡地智子・小林公治
安藤真理子・鳥越俊行・宮田将寛

はじめに 広島県立美術館所蔵「南蛮漆器書見台」に対するCT調査実施の目的と経過

1968(昭和43)年に開館した当館は、美術館建築物の老朽化に伴い、建て替えを含む新しい美術館拡張計画のなかで3本の重点収集方針を立て、①広島県ゆかりの美術作品、②1920-30年代の美術作品、③日本を含むアジアの工芸作品の方針のもとでの積極的な収集活動の結果、③については幾つかのグループに大別できるコレクションが充実し、中でも最大の質量を占めているのが旧ソ連領中央アジアの染織とジュエリーである。

本調査のきっかけは、ウズベキスタン政府により、2019年12月16日に東京・帝国ホテルで開催された「シルクロードにおけるウズベキスタンと日本国際科学学会」へ福田が招待されたことに始まった。同学会は、ウズベキスタンの国内外に所在する文化財を集大成するシリーズ本の日本篇である、Ф.Ф. Абдухоликов, Э.В. Ртвеладзе, Сергей Лаптев, Киносита Ватару, Ёнэда Юсуке, Сасаки Тацуо, Инагаки Хадзимэ, Такэда Тамако, Иваи Сюмпэй, Ёсинобу Тацуми, Сикаку Рюдзи, Фукуда-Сиддики Хироко, «Марказий Осиё маданият мероси Япония музейларида (日本の博物館が所蔵する中央アジア文化遺産)» китоб-альбоми, «East Star Media» МЧЖ, «Darakchi inform servis» МЧЖ буюртмасига кўра, Тошкент, 2019. の発行を記念して、シャフカット・ミルジョーエフウズベキスタン共和国大統領の公式実務訪問の来日に合わせて開かれ、上の書物の執筆・編集に関わったウズベキスタンと日本の研究者が数多く発表し、交流した。当館からも「広島県立美術館蔵中央アジアコレクションの全容～長い旅の末にたどり着いた染織とジュエリー」と題し、当館の中央アジアコレクションを紹介させていただいた。会場には現代ウズベキスタンで制作された折りたたみ式の書見台(ラウヒ)が出版物とともにディスプレイされていた。この場で福田が東京文化財研究所の小林と出会い、中央アジアの書見台から桃山～江戸

初期の南蛮漆器の書見台へと話題が広がった。

小林はこのウズベキスタン政府主催の学会には、同国の螺鈿史に関する調査情報を得ることなどを目的として参加していたが、かねてより日本で製作された螺鈿漆器の一様式である南蛮漆器について国内外での調査を行ってきたなかで、広島県立美術館所蔵の南蛮漆器書見台「草花蒔絵螺鈿書見台」についても2016年7月22日に同館にて実見調査を実施していたことから、この調査のことが話題となった。またこの頃、小林は南蛮漆器に対して何件かのCT調査を試み、その結果、特異な技術によって製作されている南蛮漆器書見台事例を把握し、その実態についてさらなる調査事例を積み重ねる必要性を認識していたため、この時福田に広島県立美術館所蔵書見台に対するCT調査実施の可能性について相談したところ前向きな方向性で一致したことから、その後諸般の調整を進め、2022年3月18日に奈良国立博物館で本調査を実施、今回の報告に至ったものである。

ここで「南蛮漆器」という器物について簡単に説明しておきたい。一般に南蛮漆器と呼ばれる漆器には二種類が存在する。一種は16世紀中葉に始まるヨーロッパ人の日本来航を契機として彼らの容姿や彼らが使う器物を意匠として漆器に取り入れたものであり、もう一種はヨーロッパ人自身の注文により日本で造られ、彼らがヨーロッパや中南米に持ち帰った（輸出した）漆器である。本稿で取り上げる書見台は後者にあたる。輸出用に造られた南蛮漆器の基本的な特徴は、西洋で使われたさまざまな器物形態を持ち、秋草などの花鳥文や幾何学文に螺鈿を加えた平蒔絵螺鈿装飾がなされていることで、その器種はキリスト教の信仰に関する器物と、一般生活に使用が可能なものの大きく二種に分けられる。具体的には、キリスト教具としては教会などで聖書を載せるために造られた「書見台」、キリスト像やマリア像などの聖絵画を収める「^{せいがん}聖龕」、そしてキリスト教の儀式においてキリストの聖体（肉）を意味するパンであるオスチア（Hóstia:ポルトガル語、Hostia:スペイン語）を収める「^{せいへいぼこ}聖餅箱」の三種が主要な現存品である。

この書見台には日本で制作された「南蛮漆器」と、それに形態あるいは文様の近似するがマカオを中心とした中国南部沿海地域で装飾されたと見られ、小林が「類南蛮漆器」と呼んでいる螺鈿漆器群があり、両者併せて現在57基ほど（南蛮漆器50基、類南蛮漆器7基）の伝世書見台が確認される。一方、一般生活にも利用な器物としては、洋櫃・箆笥がもっとも多く造られ

たが、特に前者は現在でもスペイン国内キリスト教関係施設にて聖遺物の収納に使われている事例があり、宗教用の器物と一般生活用の器物とを明確に分離することは困難である。またこれらの他に、テーブル、徳利、ベッド、バックギャモン用ゲームボードなど、数はそれほど多くはないもののかなり多様な器物が製作されている。その製作年代について小林は、ヨーロッパ人の到来開始からはかなり遅れる1590年代に始まり1640年頃には終焉を迎えると考えており、せいぜい40年強ほどの短い期間に造られた器物であったとみている。なお、「類南蛮漆器」の実態や定義、また南蛮漆器との関係性についてはまだ不明点が多く、今後の検討課題となっている¹。

(福田・小林)

第1章 広島県立美術館所蔵の南蛮漆器書見台について

第1節 概要

広島県立美術館は南蛮漆器を2点収蔵しており²、そのうちの1点が本稿で取り上げる「草花蒔絵螺鈿書見台」(口絵1-4、6、7)である。

図1は草花蒔絵螺鈿書見台の背板の表面で、1534年に創立されたカトリックの男子修道会イエズス会³の三つのシンボルである「IHS」の文字・花クルス・心臓に刺さる3本の釘を中央の円

1 小林公治「キリスト教具南蛮漆器の制作技術とその由来」『研究紀要』4、1-28ページ、大分県立埋蔵文化財センター、2021年 (https://researchmap.jp/b_b/published_papers/32008298)

2 もう1点は「鮫皮張草花鳥獸蒔絵螺鈿大筆筒」(89.0×65.0×52.0センチ)で、下辺に蝶番を付けた一枚の前蓋が前方へ倒れる形態のいわゆる書筆筒で、内部に19個の引出しを納める (fig.1, 2)。



fig.1 鮫皮張草花鳥獸蒔絵螺鈿大筆筒



fig.2 鮫皮張草花鳥獸蒔絵螺鈿大筆筒 (前蓋を開けた状態)

3 聖イグナチオ・デ・ロヨラ (1491～1556) を中心とする7人の同志によって設立された。1549年来日し、日本にはじめてキリスト教を伝えた聖フランシスコ・ザビエル (1506～1552) も創立者の一人。

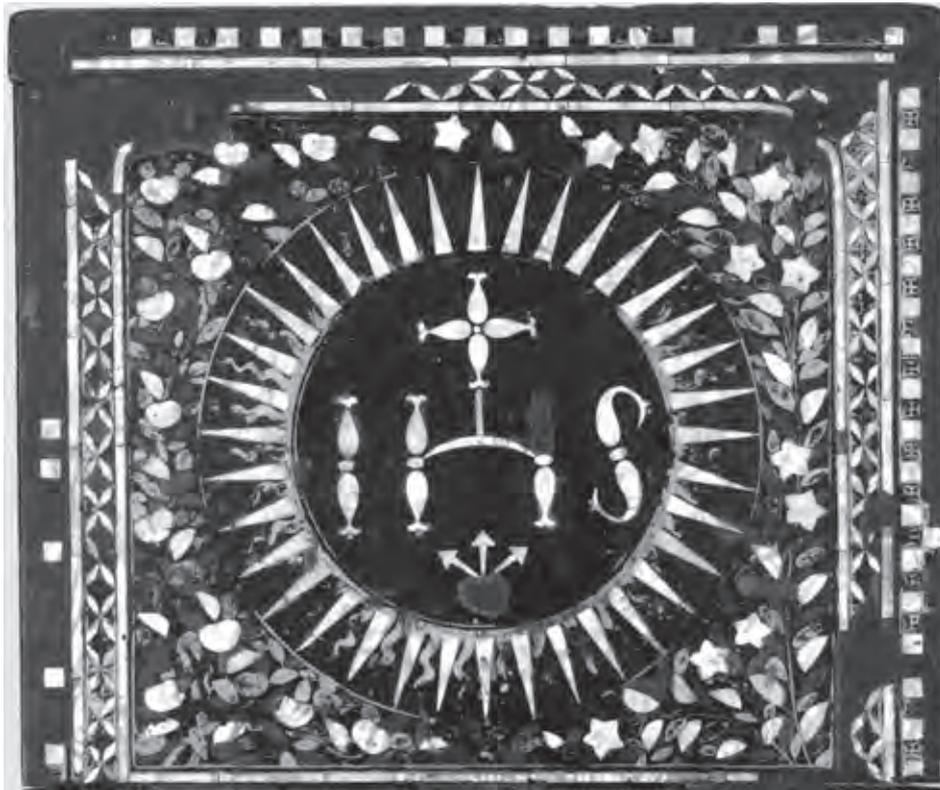


図1 背板表面

内に配し、その周縁に楔形と火炎形各36本の光芒を交互に表している⁴。円の外側には、向かって右に桔梗、左に橘を配し、その周囲三方には二重に界線を巡らせて、外周には石畳文のような幾何学文を表し、内周には花入七宝繫文を連続させている。イエズス会の三つのシンボルと楔形の光芒、桔梗の花、橘の実、一部の葉、七宝繫文は貝を文様の形に切って表し、石畳文は正方形、界線は短冊形の切貝を並べている。



図2 背板表面(部分)

そのほかの文様は主に金の平蒔絵で表し、一部の葉は銀蒔絵で表現され、銀蒔絵と螺鈿の葉、および螺鈿の花には金蒔絵の付描きで細線を施している(図2)。平蒔絵を基調とする点や、桔梗の文様を用いる点などは、同時代の高台寺蒔絵と類似している。

4 「IHS」はギリシャ語のキリストを意味するIhsusの最初の3文字をとったモノグラムという説と、ラテン語のIesus Hominum Salvator(人類の救世主イエス)のイニシャルとする説がある。3本の釘はイエスがゴルゴダの丘で十字架にかけられた際に打たれた釘の数で、周囲の光線は神の栄光を象徴している。

同様の技法で、脚部の表面には中央に橘と石畳文、左右はほぼ木地面が露出しているが、螺鈿が剥がれた跡からみて、花入七宝繫文と石畳文を表していると思われる(図3)。背板の背面には桔梗と橘、脚部の背面には朝顔が充填され、周囲に南蛮唐草を巡らせている(口絵4)。架台上部と蝶番部分は損傷が激しく文様特定が難しいが、おそらく中央に橘、左右に石畳文と七宝繫文を表していると思われる(図4)。また、架台の背面にも上部と同様の文様が見られる(図5)。側面は、現在は背板の両側面以外はずかに残るのみだが、南蛮唐草が全体に巡らされていたものと思われる(図6)。

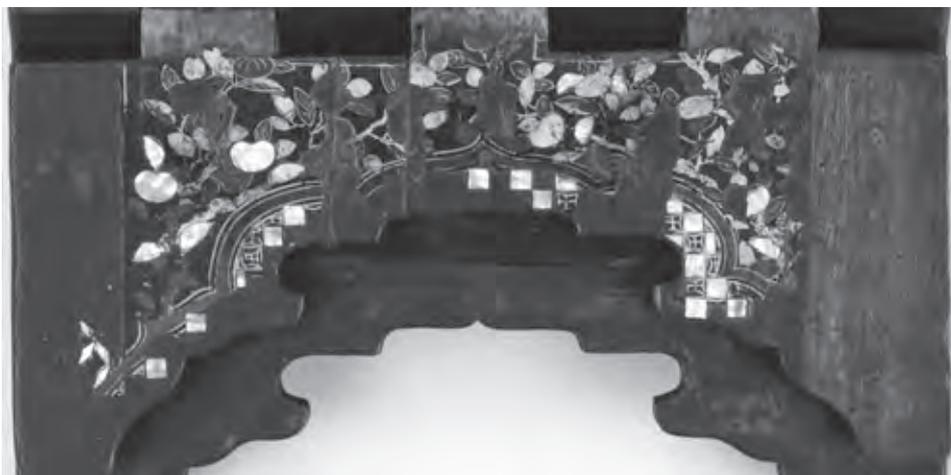


図3 脚部表面

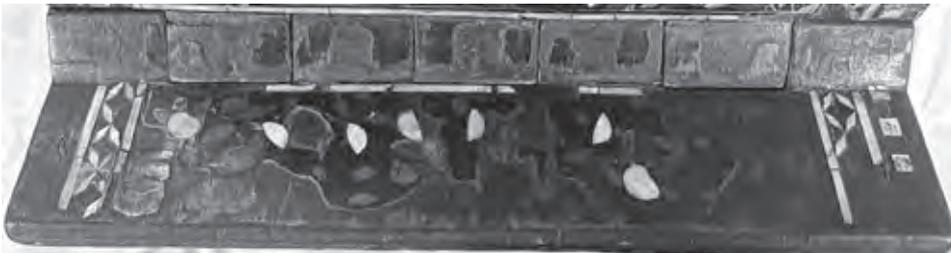


図4 架台上部、蝶番部分



図5 架台背面



図6 背板側面の南蛮唐草

構造は折り畳み式で、法量は縦が立てた状態で33.6cm、閉じた状態で47.5cm、横32.0cm、厚1.5cmとなっている。

(岡地)

第2節 修復

平成6年の収集時、同書見台の傷みがはげしかったため、平成11年から翌12年にかけて保存と展示のための修理を行った(修理前:口絵3、4、7、修理後:口絵1、2、6)。筆者は主としてこの業務に携わった当時主任学芸員の村上勇氏とともに幾つかの場面に立ち会った。村上氏にこの修復について改めて尋ねたところ、江戸時代の松平不昧公による修復事業をモデルとしたのだったそうである。

島根県出雲市の出雲大社から北西方向、日本海に面した日御碕神社^{ひのみさき}に伝わる「白糸威鎧」は源頼朝奉納の甲冑として知られ、現在は国宝、東京国立博物館に寄託されている。

白糸威鎧は、江戸時代には源頼朝奉納の甲冑として知られていました。幕末には威糸(おどしいと)などが傷んでいたため、文化2年(1805)、当時の松江藩主松平治郷(まつだいらはるさと)の命によって江戸で修理され、往年の姿を損なうことなく現在の形に仕立てられました。その際、破損部分の繕いには「文化二年修補」の文字を染めた白韋(しろかわ)が用いられ、取り外された威糸や紐などの残欠類は別に保管されました。また修理を担当した寺本安宅によって61ヶ条の修理記録「源頼朝卿御鎧修補注文」が記されています。このような治郷の宝物に対する姿勢は、現在の文化財の修理に通じるひとつの規範を示しています。⁵

松江藩10代藩主松平治郷、号は不昧は、松江藩中興の祖あるいは江戸時代を代表する茶人のひとりとして現代でも当地で尊敬を集めている⁶。治郷により行われた甲冑の修復が後世になっても補修部分がわかるように補修記録を残したことは、現代の文化財保存の先駆的事例で

5 「日御碕神社の甲冑と模写図」東京国立博物館 (https://www.tnm.jp/modules/r_free_page/index.php?id=1723 2023年1月27日参照)

6 「松平治郷」国史大辞典編集委員会編『国史大辞典13』吉川弘文館、1992年

あった。当館が書見台の修復にあたっては、この事例を範としたのだという。

本作品の修復にこのような背景があることから、本報告では修復報告書をもとに修復の詳細を述べたい。元にした資料は、本修復者によって当館へ提出された手書きの『保存修理報告書「草花蒔絵螺鈿書見台」一基』である。

保存修理の概要

- 蒔絵粉の作業に対する耐久性確認
- 塗膜の作業に対する漆含浸による色斑確認
- 劣化による表面の凹凸や艶の状態
- 保存に適した仕上げ材料の選択

結果的には塗面螺鈿の剥落・浮きは全体に平面で仕上げなければならず、数が多いことから根気のいる作業となりました、と修復者の言葉が添えられている。

塗膜と螺鈿の浮き圧着

収集時は螺鈿の浮きが発生している箇所が多くあった。螺鈿の裏に漆が回ることによって色調を変えないために、漆ではなく膠を使用し、薄めの膠を4～5回にわたって充填した。修復者が独自に作成した押さえ具で螺鈿の一つひとつに圧力を加減して押さえた。膠液充填に伴う押さえ材料は、塗面を傷めないよう、独自の工夫により、ラップを敷き、薄スポンジとアクリル板(大中小)3枚、ゴム板をセットして竹の棒でひとつずつ圧力を変えて押さえた(図7)。圧着した所は、表側83カ所、うちとくに浮きの激しかった所41カ所、裏側70カ所、うちとくに浮きの激しかった所30カ所に上った。

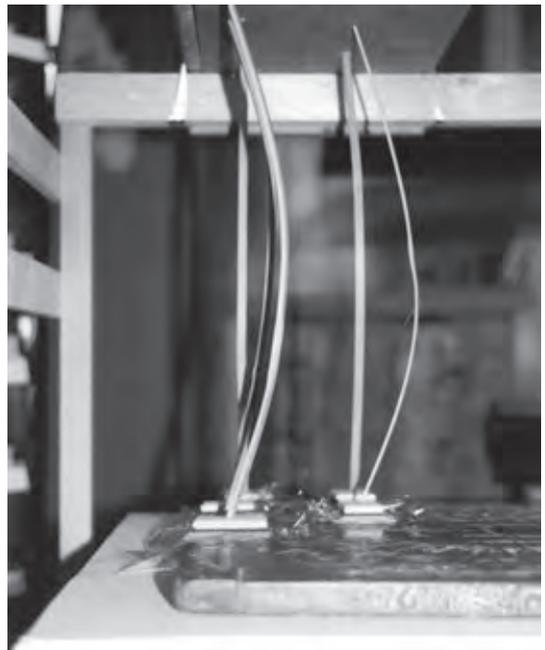


図7 竹の棒で圧力を調整した螺鈿の圧着

螺鈿の正しい位置への移動

後世の修理により、IHSのIの中央の楕円形螺鈿が左上の七宝模様の一部に、また、その上の螺鈿がずれてはめ込まれ、ボンドで接着されていた。これらを正しい位置に接着した(図8、9)。



図8 後世の修理による誤った螺鈿配置



図9 図8部分の修正後 中央の七宝模様、その右下の楕円形を移動した

手板作成(口絵5)

塗り下地は速やかに螺鈿と平滑にするために、沖縄の堆錦をヒントにして1回で、蒔き地たたきにして、わずかな凹凸は薄く引き錆とした。

塗りについては、現代の黒呂色、擦り墨を漆に入れたもの、煤煙を漆に入れたものの黒色3色が作られた。

南蛮漆器に見られる細かい蒔絵粉

修復者の見解によれば、書見台に見られる細かい蒔絵粉はかなり細かい粉のため簡単な磨きで仕上げることができる。粉を経済的にかつ地塗りムラをなくすためには、絵漆で描き、時間をおき、やや締まった頃合いを見て、和紙で1~2度吸い取って金粉を蒔くのが通常の方法である。本

作の蒔絵粉の消失した所にも和紙の吸い取り跡ではないかと思われるところがある。修理では数種の和紙を試し、最適な和紙が使われた。和紙による吸い取りが不十分だと、どうしても金が沈んで漆が滲み出て、茶色っぽくなる。

螺鈿の復元

本作に使用された螺鈿は、アワビ貝で厚0.35~0.55mmと厚さは一定しない。復元部分は平均の0.4mmとした。(図10、11)

先のIHSのIの中央の楕円形螺鈿の裏面にはヤスリ目が残り、麦漆と思われる黒い付着物があった(図12)。



図10 アワビ貝を糸鋸で裁断する

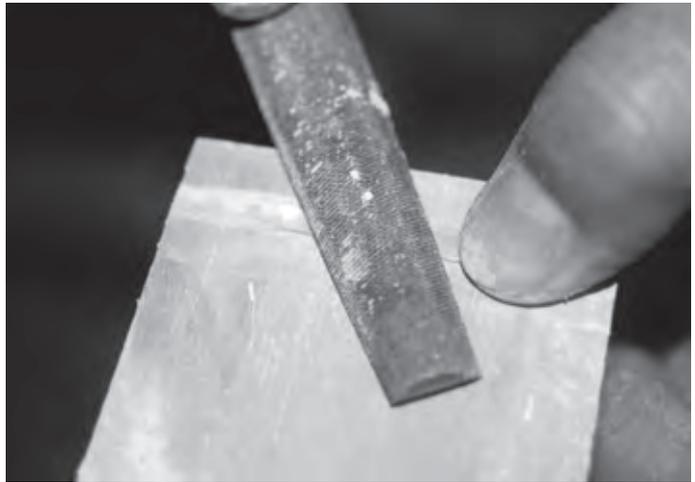


図11 アワビ貝の厚みをヤスリで調整する

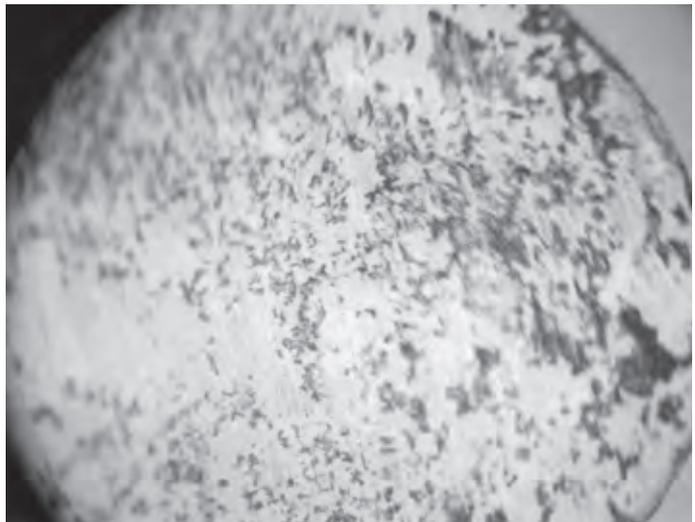


図12 図11右下の楕円形螺鈿の裏側にはヤスリ目が残り、麦漆と思われる付着物がある

復元について

全体の破損部が多く、経年変化の表情に対して、塗膜の復元は通常の漆器に見られる時代色に対して格段に白っぽく、色味の復元は難しく再現することはできない。また、蒔絵粉も細粉でありながら、厚みもあり、大小入り混じった特徴を持つもので再現できない。模様全体を占める螺鈿が多いこともあって、剥落痕のはっきりした所を49カ所選んで復元した。復元螺鈿は雲母のように劣化し、この白色に合わせるには厚みを同じにしても青みが強く、伏彩色に薄胡粉を補い、膠で接着した。螺鈿の復元箇所は図13、14のとおり。



図13 表面の螺鈿追加部分（太線部）

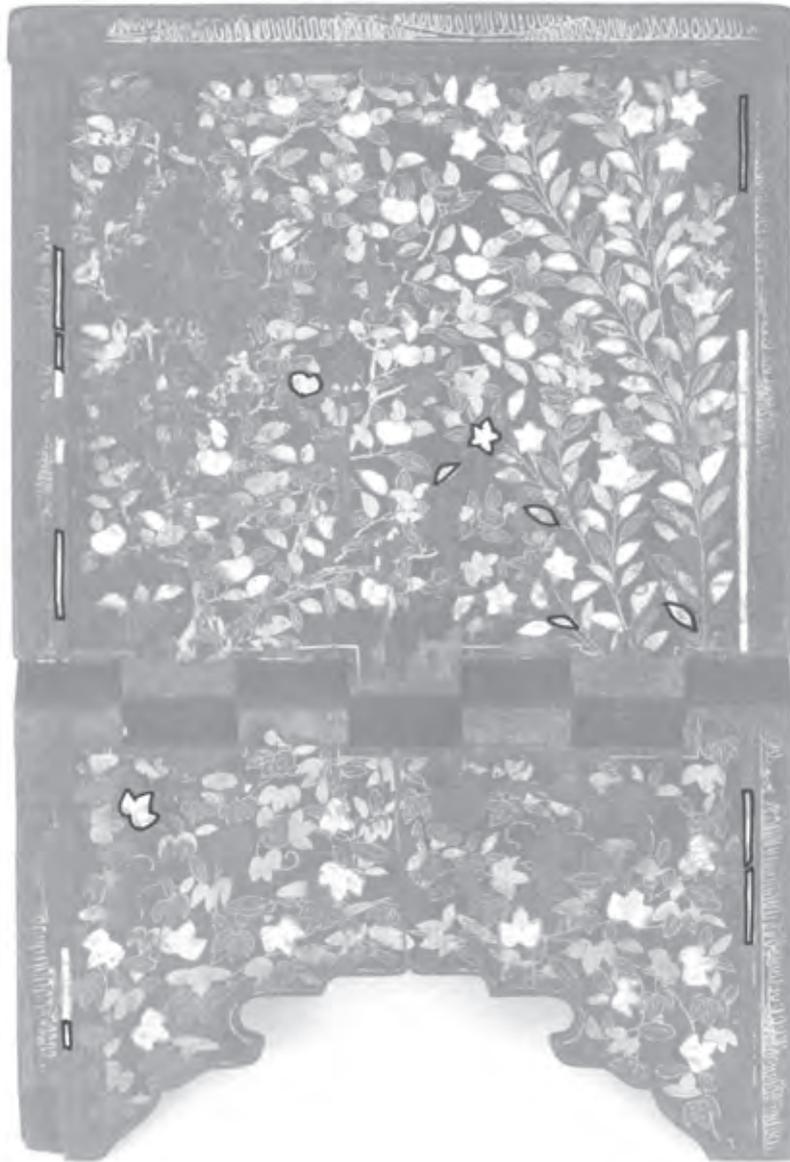


図14 背面の螺鈿追加部分(太線部)

作業手順

- 表面：螺鈿浮きの押さえが完了した後、表面に残った膠を完全に取り除いた。
- 虫穴：虫穴が数多く、穴はかなり奥まで広がっており、漆を入れ、石粉下地で口を埋めた(図15、16)。
- 際錆：塗面の自然劣化による白っぽさを軽減するために、砥の粉よりも細かい石粉を選択し、煤煙を少量加えて色調を調整した。余分な錆を吹き上げる際には摩擦を最小限にし、本来の塗面を極力傷めないよう、また、蒔絵が取れないように細心の注意を払った。段差

に対しては、木部塗面と螺鈿の際すべてに錆を施した。

- 木部：塗面強化のため、全体に漆を染み込ませた（図17）。下部の木部には薄めの生漆を含浸した。



図15 虫穴に漆を入れる



図16 虫穴を石粉下地で埋める

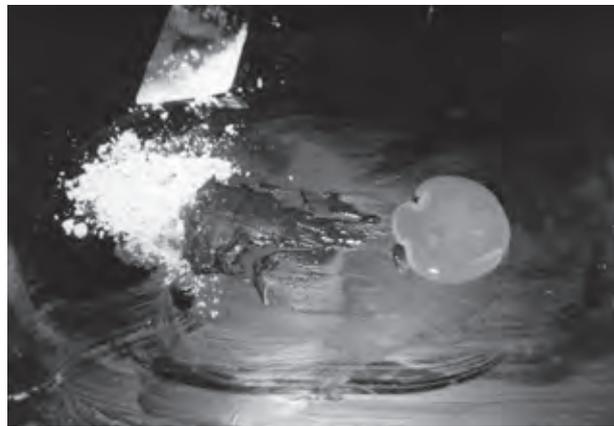


図17 木部のための漆調製 生漆と煤煙、石粉

修復の方針は、その目的や考え方、また、経験や時代が変遷するに従って、変化していくものである。当館の書見台修復は、先の松平不昧の精神を以って、展示と保存を最重要として一部螺鈿の後補を含め、最善と考えられる技法と天然の材料を駆使して行われた。修復から20年経った現在も良好な状態を保っている。そして、今回のCT調査を経て、また調査が進展した。

(福田)

第2章 CT調査

第1節 広島県立美術館所蔵南蛮漆器書見台 (HD-041)

(1) はじめに

これまで奈良国立博物館では、南蛮文化館所蔵のイエズス会紋章入書見台ならびにIHS菊桔梗蒔絵螺鈿書見台、インドネシアの木彫コーラン書見台、トルコの花唐草幾何学螺鈿コーラン書見台のX線CT調査を実施し報告してきた^{7,8}。今回は、広島県立美術館が所蔵する草花蒔絵螺鈿書見台を対象として、類品との比較ならびに構造観察を目的とした調査について報告する。

(2) 調査概要

調査は広島県立美術館学芸員(福田、岡地)の立ち会いのもと、科研基盤研究(A)「アジア螺鈿文化交流史の構築—物質文化史の視点から」(研究代表者:小林公治)の一環として実施した。CT撮影と画像作成はいずれも安藤が担当し、撮影条件等は以下のとおり。

撮影日時:2022年3月18日

装置概要:大型文化財用X線CTスキャナ装置(YXLON International社製)

X線発生装置(Y・TU 320-D05)、撮影装置(XRD1620)、撮影装置~X線発生装置
間距離 約1630ミリメートル

撮影条件:電圧 320 kV、電流 2 mA、焦点寸法 0.4 mm、X線露光時間 400ms、分割撮影枚数
900枚、作品~X線発生装置までの距離 約1213mm

解析ソフト:VGStudioMAX3 (Volume Graphics社製)

撮影に際し、作品に負荷がかからない程度の緩やかな斜面をもちつつ、作品の安定にも考慮して設計した撮影台を用いた(図18)。

7 鳥越俊行・小林公治・能城修一・北村繁・清水健・田澤梓・安藤真理子・矢野孝子「南蛮文化館所蔵南蛮漆器類のX線CT調査」日本文化財科学会第35回大会、2018年

8 小林公治「CTスキャンによる製作技法の解明」『令和2年度企画展 大友氏の栄華IVBVNGO NAMBAN-宗麟の愛した南蛮文化-』大分県立埋蔵文化財センター、2020年

(3) 調査結果とまとめ

背板の断面を中心に、板の縦断面を右側、横断面を上下に配置した画像を図19に示す。図19～図25を見ると、板目や木口の木目が全て通っており、同材から採られた一枚材を用い、設置時に交差する脚部（蝶番部分）も削り抜いて制作していることが判る。背板上端の5か所に木釘あるいは竹釘を打ち付けて端喰^{はしばみ}を取り付けている。背板上端の端喰の取り付けは日本製の南蛮漆器書見台にのみ用いられる特徴とされていることから⁹、本作品は南蛮文化館所蔵のIHS菊桔梗蒔絵螺鈿書見台と同様に日本製である可能性が高い。

この書見台の特徴としては、蝶番架台部と脚部（上面下面とも）に金釘と思われる釘で別材を接合している点である。特に脚部は別材を用いている（図19、図25）。これらの別材は修理で補われたとみられるが、釘の多さと別材の存在から、本作品は苦心しながらも修整もしくは修理しながらも伝世した書見台だといえよう。

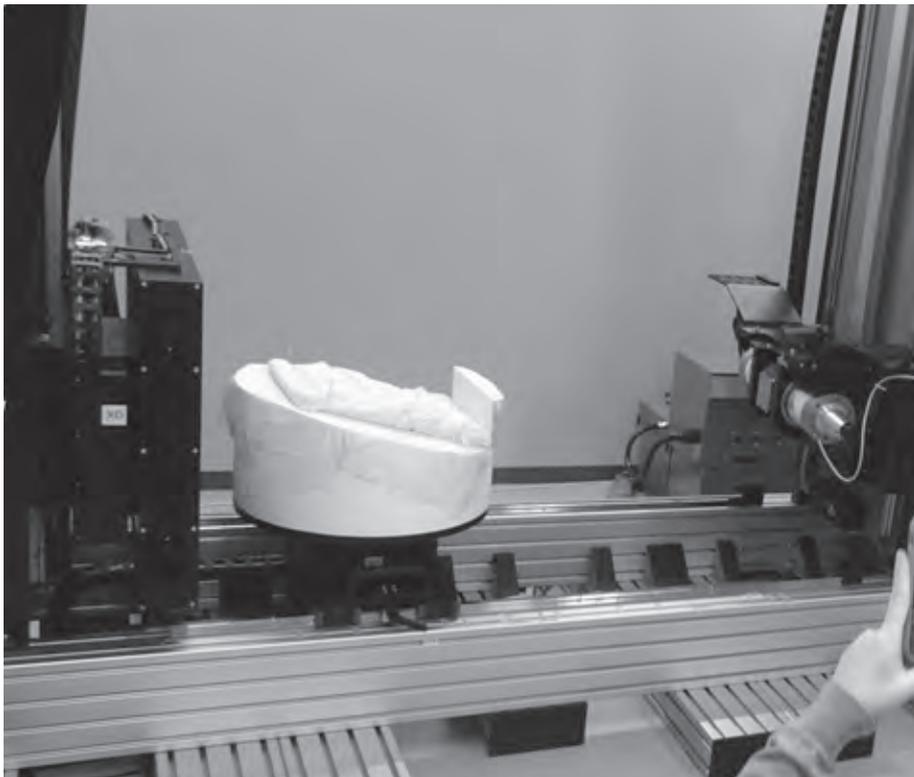


図18 X線CT調査の様子

9 註1文献参照。

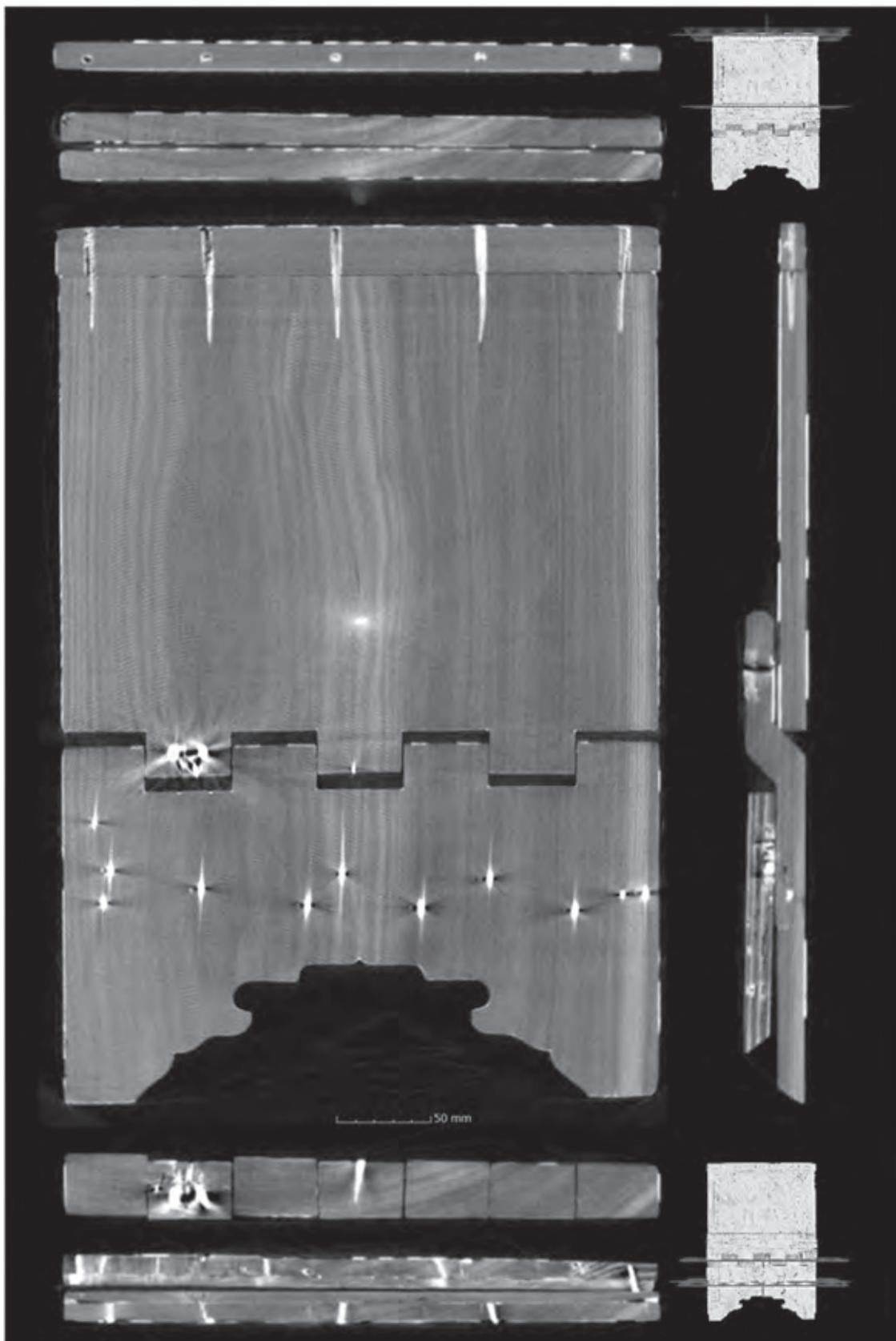


図19 草花蒔絵螺鈿書見台のCT画像

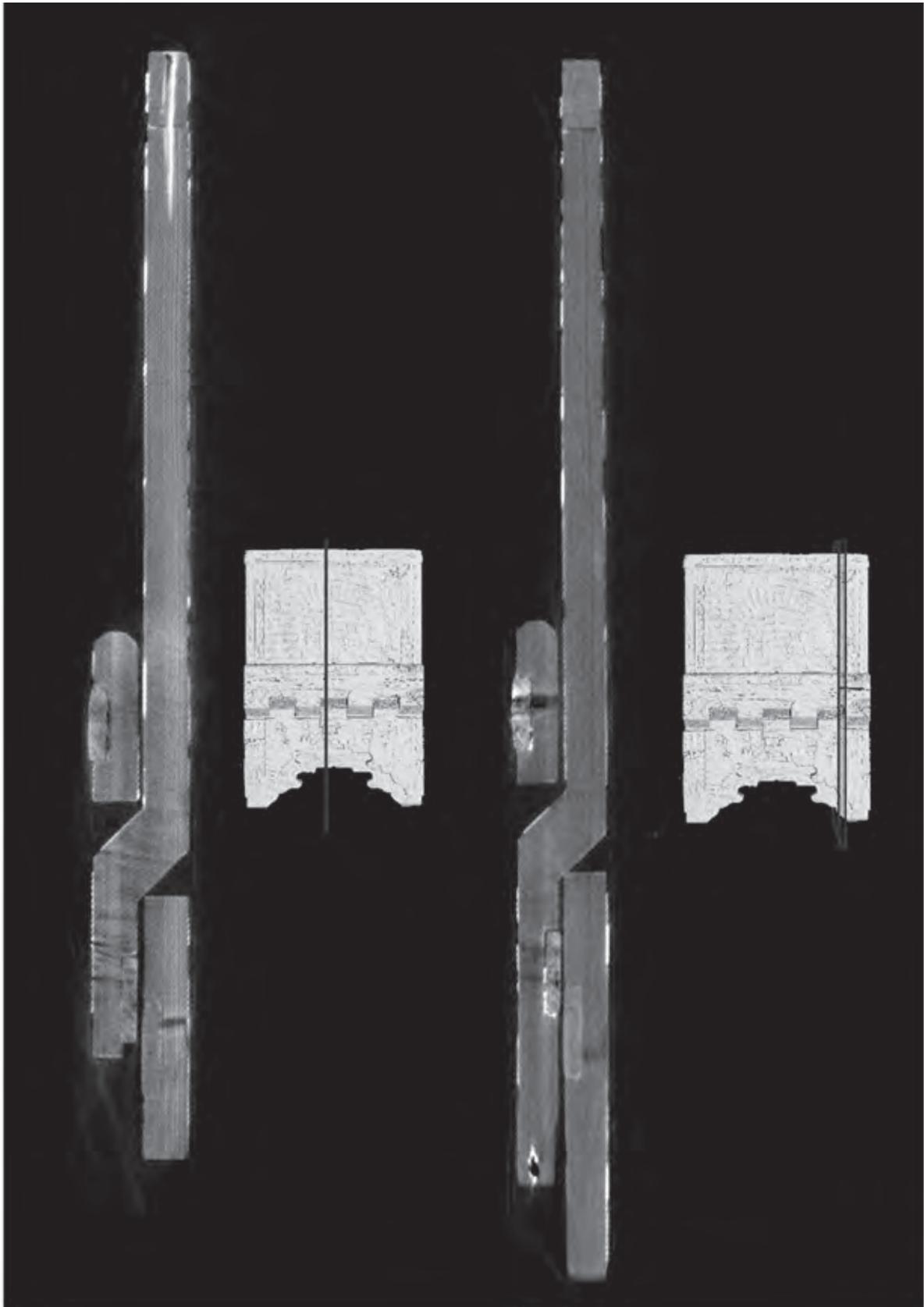


図20 縦方向（中央付近・向かって右端）の断層画像

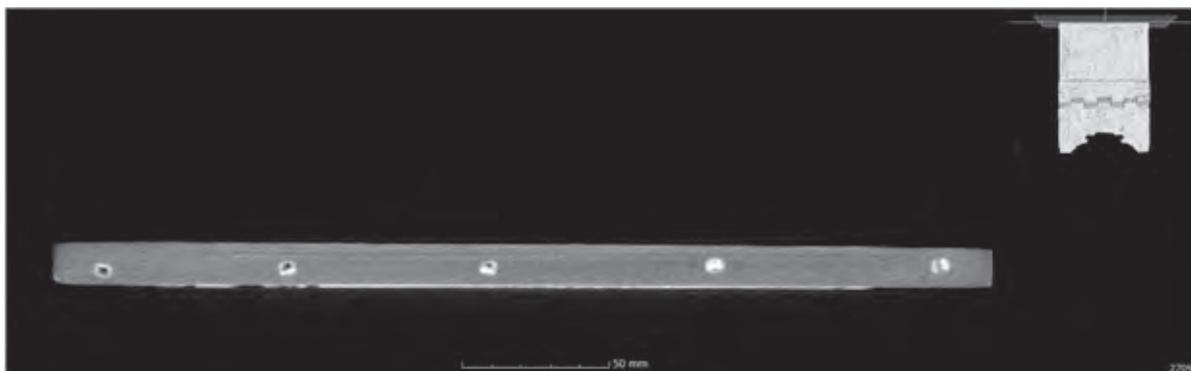


図21 横方向の断層画像(上部の端喰)

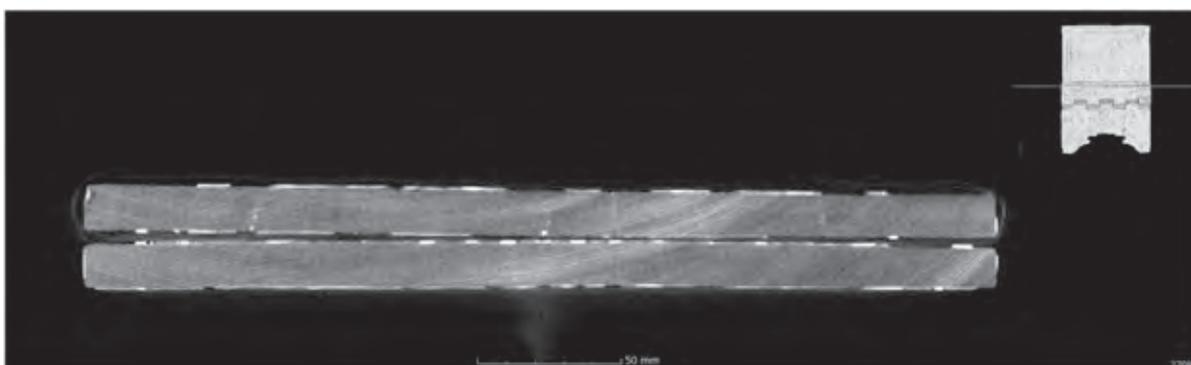


図22 同上(中央付近)

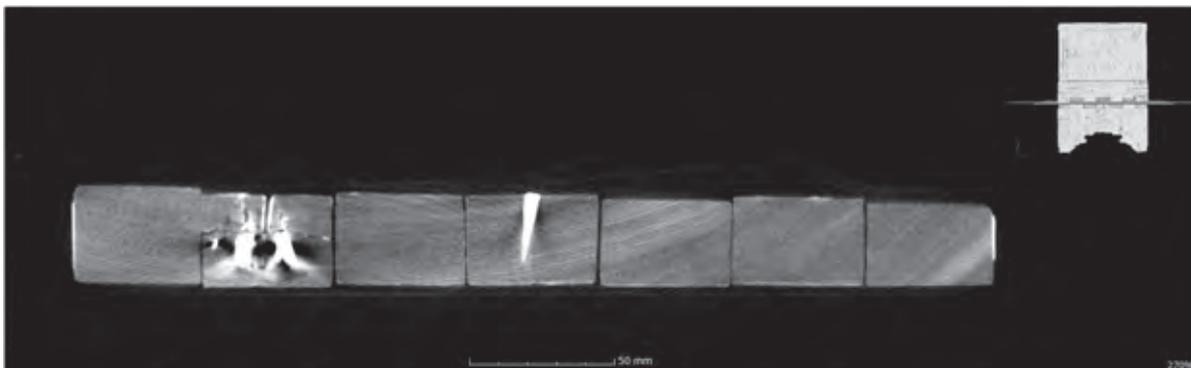


図23 同上(交差部分)

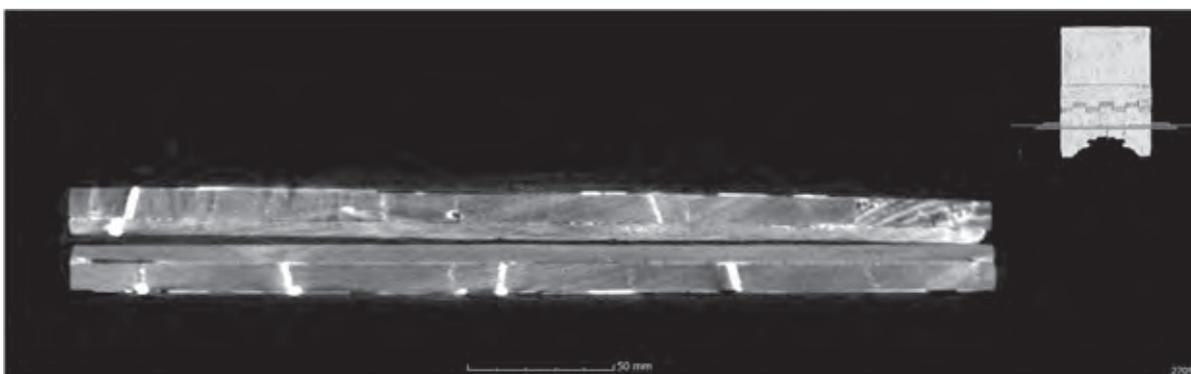


図24 同上(交差部やや下)

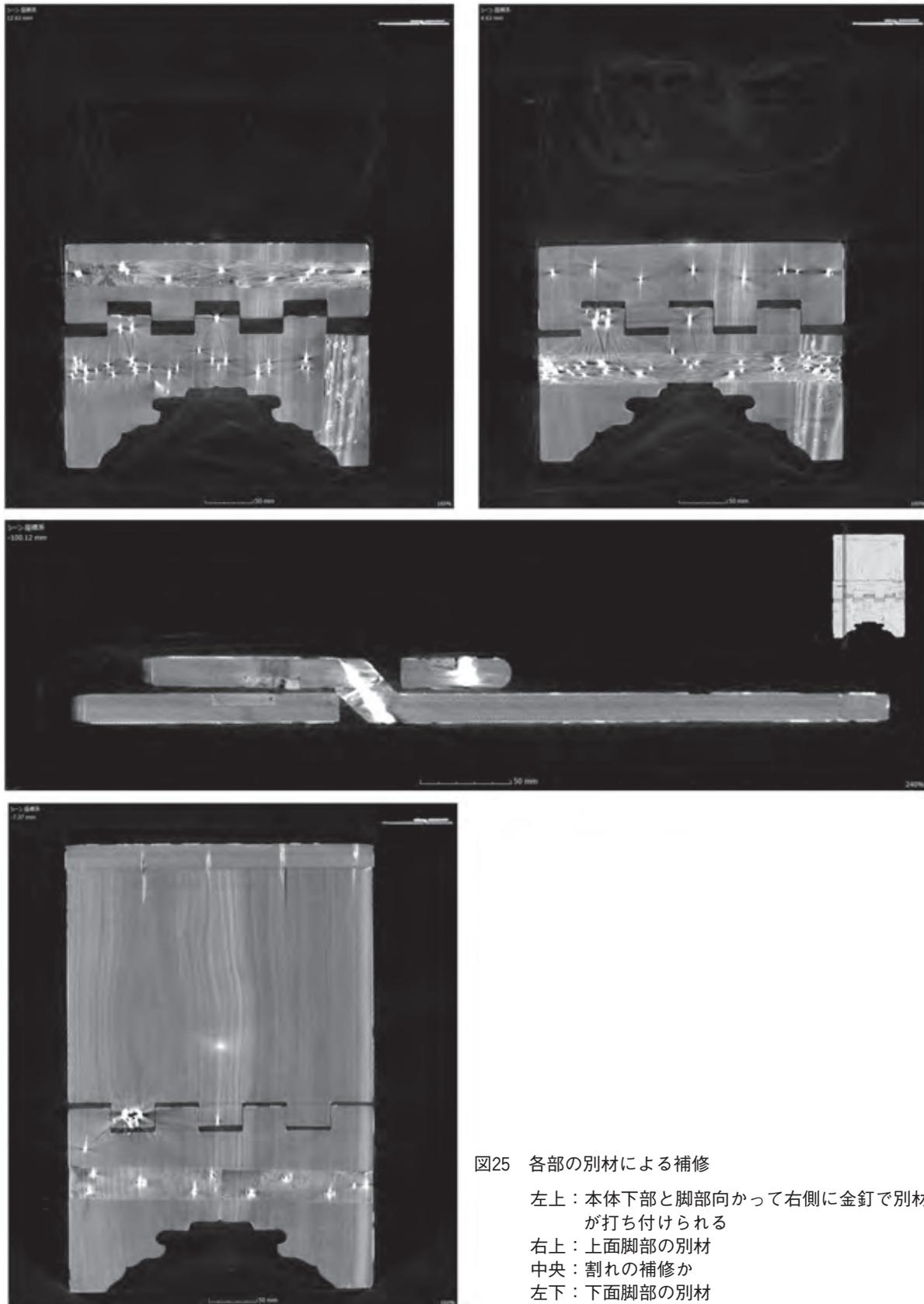


図25 各部の別材による補修

- 左上：本体下部と脚部向かって右側に金釘で別材が打ち付けられる
- 右上：上面脚部の別材
- 中央：割れの補修か
- 左下：下面脚部の別材

(安藤)

第2節 東京国立博物館所蔵南蛮漆器書見台 (H-4428)

(1) はじめに

東京国立博物館が所蔵する「IHS七宝繫蒔絵螺鈿書見台」(列品番号H-4428)について、構造把握ならびに広島県立美術館所蔵の草花蒔絵螺鈿書見台や類品との比較検討を目的に、当館のCT装置で調査を行った結果について報告する。本品の製作は安土桃山～江戸時代(16～17世紀)とされており、木製漆塗、縦50.7cm、横37.5cm、厚1.2cm。

(2) 調査概要

調査は小林からの依頼を受け、東京国立博物館漆工担当研究員立ち会いのもと、2021年11月11日に当館の高出力大型文化財用CT(エクスロン社製大型CT)にて実施した。X線管はY.TU600-D02、フラットパネル検出器を備え、撮影条件はX線出力550kV、1.25mA、1回転当たりの撮影枚数2070枚、1枚当たりの撮影時間0.5秒、焦点寸法0.5mm、構築画像ピクセルサイズ約0.26mmで行った。なお、得られたデータはVolumeGraphics社のVGStudioMAX3で解析した。

(3) 調査結果とまとめ

背板の断面を中心に、縦断面を右側、横断面を上と下に配置した断層画像を図26に示す。次に、背板の断層画像(図27)、縦方向の中央付近(図28)と右側(図29)、横方向の端喰(図30)・中央付近(図31)・交差部分(図32)・交差部やや下(図33)を個別に示す。

CTでは、X線を透過しにくいものほど白く表示される。またCTでは木目を判読できるが、これは冬の成長が遅い部分が夏の成長の早い部分と比べX線を透過しにくいいため1年の成長が白黒交互に識別できることによる。得られた画像を詳細に検討した結果、一枚の厚い板目材を縦に上下から半裁し、やや下寄りの交差部分を表裏両方向から削り抜いて蝶番とする一枚板造り構造であると推定した。背板の頂部には歪み防止用の横板である端喰を竹などの木釘で取り付けていた。

小林¹⁰によれば、背板上端に端喰を取り付けるのは日本製の南蛮漆器書見台にのみ用いられた特徴とされており、本調査での構造観察から本品も日本製であることが示唆される。交差部を詳しく観察するとわずかな切れ込みの段差などが認められるため、今後調査例を増やし詳細に検討することで製作技術を解明することが可能になるであろう。

10 註1文献参照



図26 IHS七宝繫時絵螺鈿書見台のCT画像

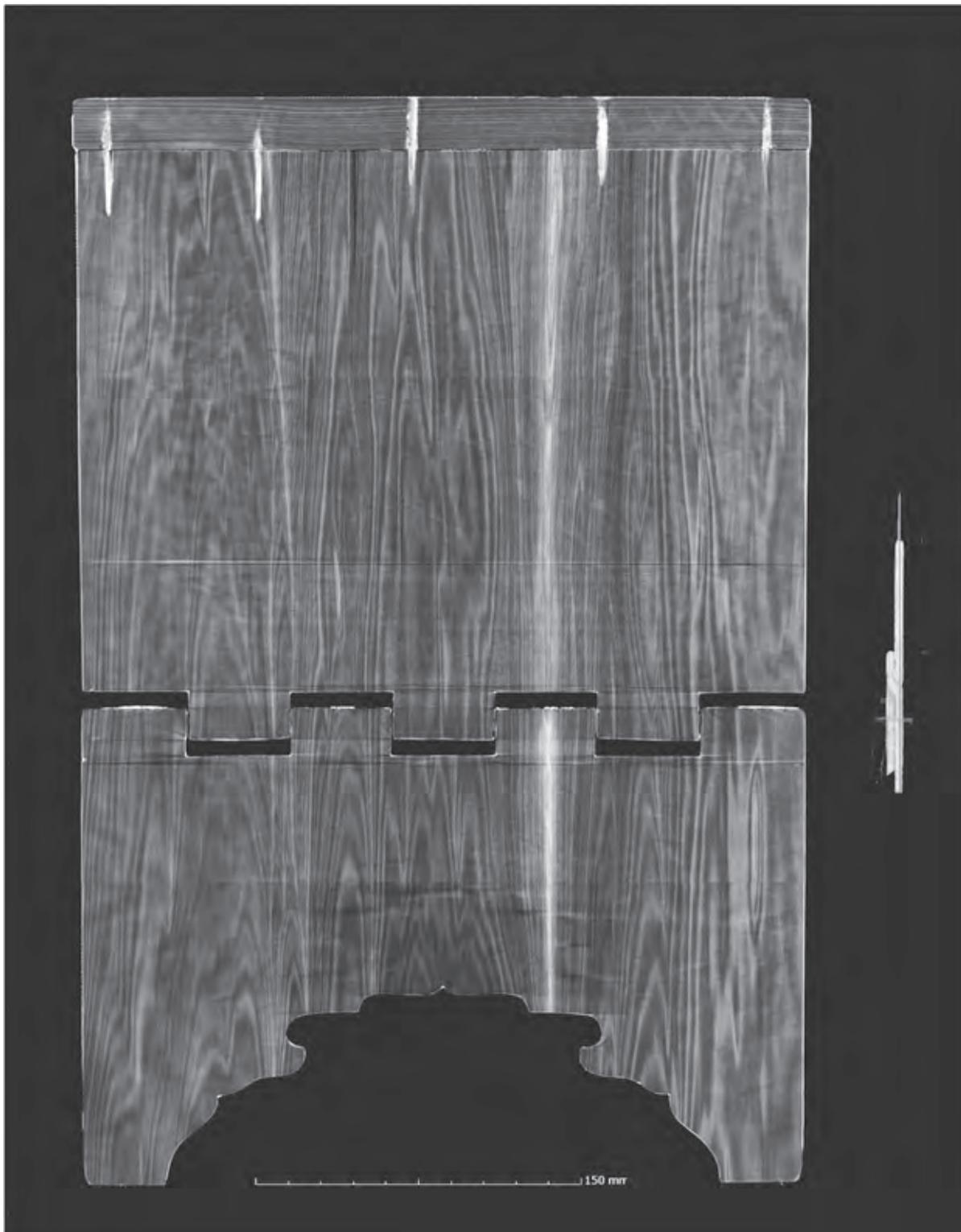


図27 背板の断層画像

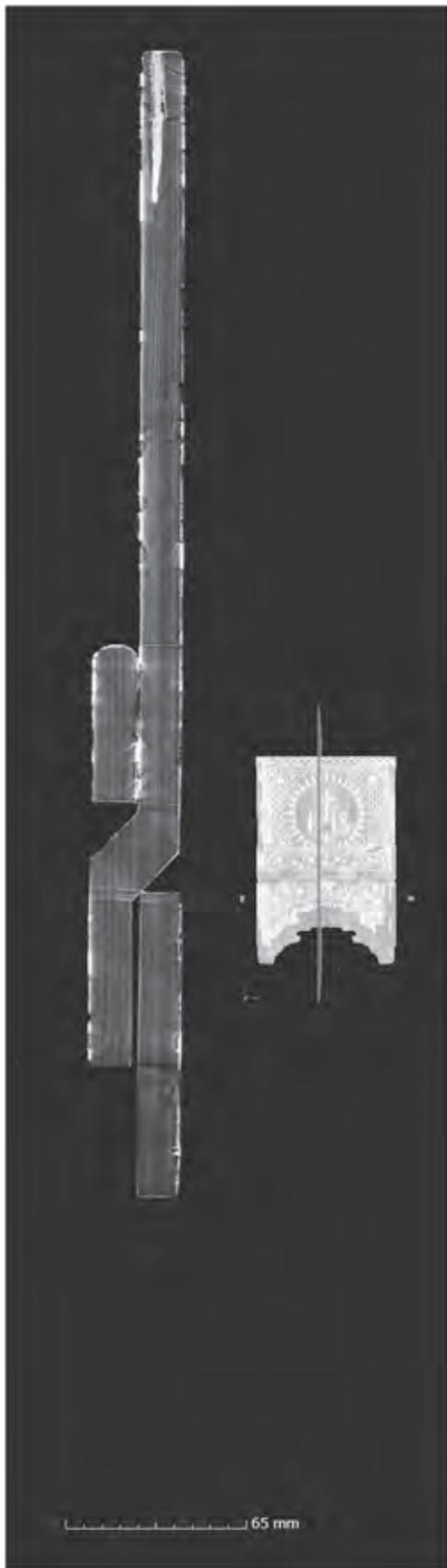


図28 縦方向の断層画像 (中央付近)

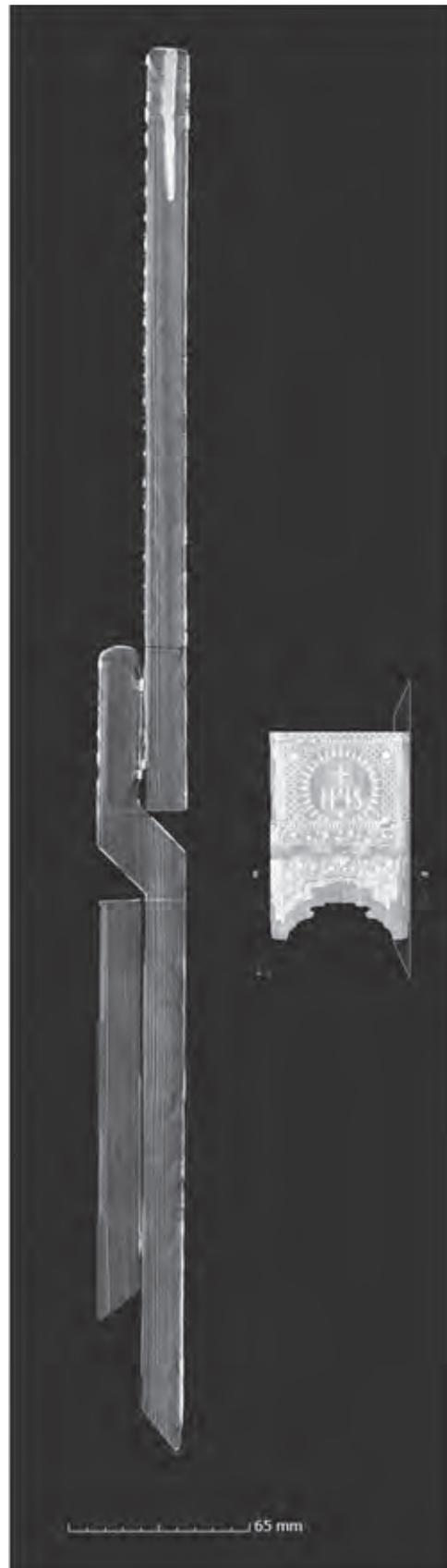


図29 同左 (向かって右端)

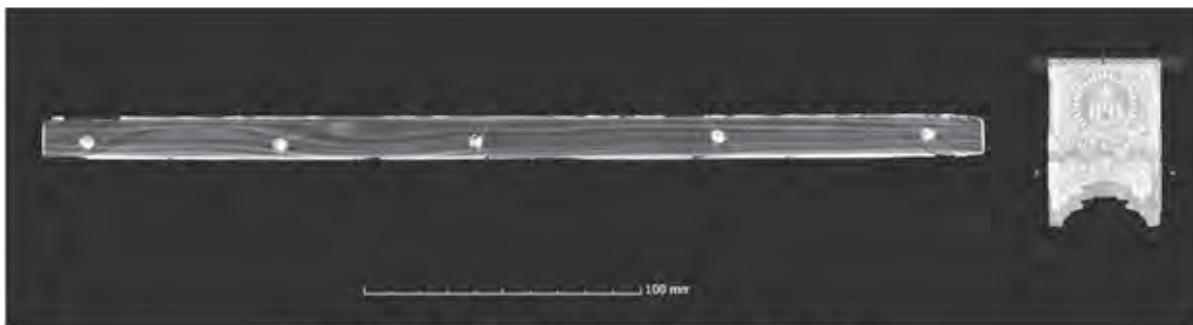


図30 横方向の断層画像(背板上部の端喰)

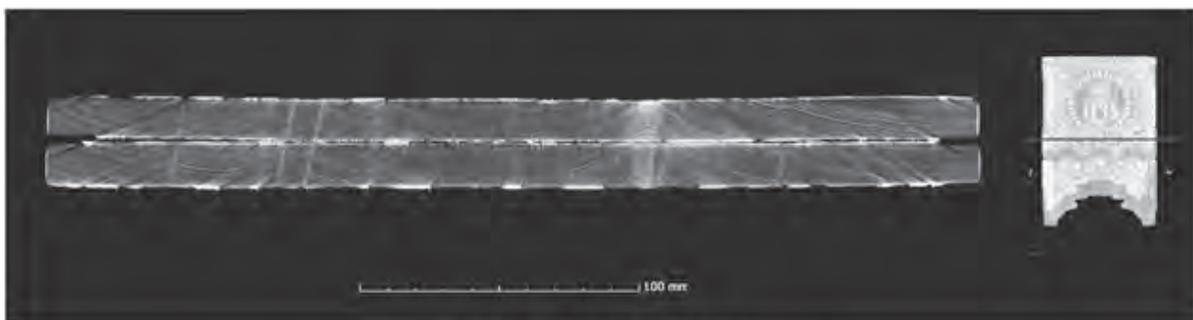


図31 同上(中央付近)

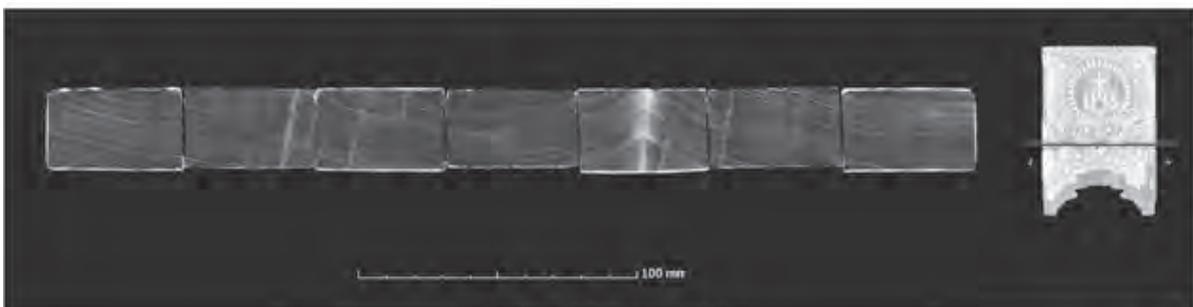


図32 同上(交差部分)

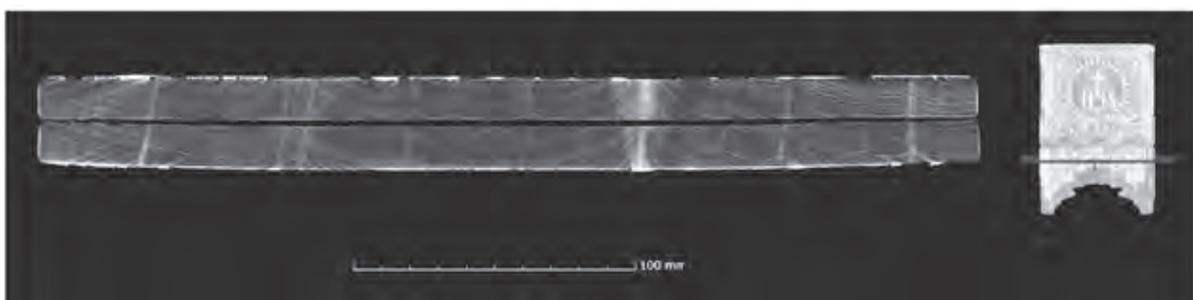


図33 同上(交差部やや下)

(鳥越・宮田)

第3章 文様と形態からみた関連書見台の比較

(1) 広島と東京の両書見台、および文様特徴が類似するヨーロッパ伝世の書見台2基について

本章では広島県立美術館（以下、広島県美と表記）と東京国立博物館（以下、東博と表記）にそれぞれ所蔵される南蛮漆器書見台2基（以下、それぞれ広島県美書見台、東博書見台と表記）に加え、実見調査によって広島県美・東博双方の書見台と共通する脚部縁取り線や文様特徴を持つことが確認されたリスボンの聖カタリーナ教会所蔵「IHS幾何学蒔絵螺鈿書見台」（以下、聖カタリーナ教会書見台と表記）、およびスペインのヴァリャドリド博物館所蔵「IHS幾何学蒔絵螺鈿書見台」（以下、ヴァリャドリド博書見台と表記）¹¹の書見台4基について、文様と形態の両点からその位置づけを検討したい。

広島県美所蔵の南蛮漆器「草花蒔絵螺鈿書見台」については上記で記載がなされているので、ここでは東博所蔵南蛮漆器「IHS七宝繫蒔絵螺鈿書見台」（所蔵品番号H-4428）、および聖カタリーナ教会書見台（所蔵品番号E-4）とヴァリャドリド博書見台（所蔵品番号349）について簡略に記載する。

東博書見台（口絵8、図34）の法量と構造は第2章第1節で報告された通りであり、一般的な南蛮漆器書見台と共通する。広島県美書見台同様、鍔金具は打たれていない。総体は黒漆塗り



図34 東京国立博物館所蔵南蛮漆器「IHS七宝繫蒔絵螺鈿書見台」（左：表面・右：背面）

11 聖カタリーナ教会所蔵書見台は2023年1月31日に、またヴァリャドリド博物館所蔵書見台は2014年7月10日にそれぞれ現地にて実見調査を行った。

で、全体を平蒔絵と螺鈿で稠密に装飾する。表面の聖書架台上半部には中央に曲線分節状に組み合わされたイエズス会の印 (insignia) であるIHS紋と心臓に刺さる三本の矢のモチーフを置く。その外周には光輪 (Halo) を巡らし、さらにその外側を花入七宝繫文で埋めている。この七宝繫文の四隅には貝で梅花を表す円紋を置く。外周縁辺は菱文と鋸歯文の二重幾何学文で縁取っている。本書見台の主要文様特徴は架台上部表面全体を幾何学文で埋めていることであるが、このように幾何学文が優占するようになるのは南蛮漆器全体の中でも新しい時期の傾向であると筆者は捉えている¹²。また架台の蝶番各組み合わせ部7か所の上面には梅花と思しき花文を置いているようであり、その端部には南蛮漆器にはあまり見られない微塵貝を散らす。

下半部 (脚部) はおおむね上半部と同様に左右の縁辺を二重の幾何学文で縁取り、その内部は向かって右を橘樹、左を桔梗で埋めているが、この文様構成は広島県美書見台前面上半部の秋草文様構成を反転させると一致する。東博書見台の側面全体には南蛮唐草で、また背面上半部と下半部も共に縁辺を南蛮唐草で細長く縁取ったうえでその内側全体に下方から立ち上がる橘樹を密に這わせている。なお、筆者がやはり後出的な南蛮漆器の技法の特徴と判断している針描の省略も全体に確認できるようである。

図35は聖カタリーナ教会書見台であり、縦48.3cm、横31.7cm、厚さ3.5cmを測る¹³。表面上半部はIHS紋と光輪の周囲を菱形の幾何学文で埋め、縁辺は南蛮唐草と鱗文で二重に区画する



図35 リスボン、聖カタリーナ教会所蔵南蛮漆器「IHS幾何学蒔絵螺鈿書見台」(左：表面・右：背面)

12 小林公治「南蛮漆器書見台編年試論」『美術研究』417号、43-64ページ、東京文化財研究所、2016年。

13 本書見台は近年かなり修復を受けており、特に蒔絵文様は後補部分が多い。本稿執筆に際しては、同教会より提供された修復前画像および観察により当初部分を識別判断した。

が、南蛮唐草文による区画帯の上端角に星形の貝片を紋のように置く。架台端部には広島県美書見台と近似する石畳文で埋め、脚部表面の地文には橘樹を描く。背面は上半部全面をやはり橘樹で、下半部を葛唐草文で埋め、縁辺全体は南蛮唐草で区画する。鍔金具は当初より打たれていなかったようである。

図36はヴァリャドリド博書見台であり、縦49.9cm、横31.3cm、厚さ2.9cmを測る¹⁴。文様が遺存している部分からの判断であるが、表面上半部はIHS紋と光輪の周囲を七宝繫文で埋め、縁辺も三角文と石畳文の幾何学文二種により二重に区画する。架台端部は同じく石畳文とし、脚部表面の地文もやはり橘樹である。背面も上半部の地文は橘樹、下半部の地文は葛唐草としており、この点でも聖カタリーナ教会書見台と共通している。またやはり、当初より鍔金具は打たれていなかったとみられる。

これら聖カタリーナ教会とヴァリャドリド博の両書見台は、現在筆者が確認している南蛮漆器書見台の中でもっとも東博書見台に近似していると思われる。

表1はこれら3基の書見台に広島県美書見台、そして以下に説明するスペイン、メディナ・デル・カンポのアウグスチン教会所蔵書見台の文様内容を簡略にまとめたものであるが、①から④までの書見台4基には文様構成や文様内容的に高い相互類似性が確認される。またさらに、表面上半部の地文への幾何学文の採用という点で、本節でみた②から④の書見台3基にはより強い共通性が認められると言っても良いのかも知れない。



図36 スペイン、ヴァリャドリド博物館所蔵南蛮漆器「IHS幾何学時絵螺鈿書見台」(左：表面、右：背面)

14 本書見台もかなりの修復が行われているが、調査時に閲覧した修復報告書なども参照して当初文様等を検討した。

表1 各書見台文様の比較

書見台名		①広島県美書見台 (HD-041)	②東博書見台 (H-4428)	③聖カタリーナ教会 書見台(E-4)	④ヴァリャドリド博 書見台(349)	⑤アウグスチン教会 書見台
表 面	中心文様	IHS紋	IHS紋	IHS紋	IHS紋	
	地文様	桔梗・橘樹文	幾何学(七宝繫)文 梅花円紋	幾何学(菱)文	幾何学(七宝繫)文	鉄線唐草文
	縁辺文様	幾何学(七宝繫)文 幾何学(石畳)文	幾何学(菱)文 幾何学(鋸歯)文	南蛮唐草・星形文 幾何学(鱗)文	幾何学(三角)文 幾何学(石畳)文	南蛮唐草文
	架台端部	幾何学(石畳)文	微塵貝	幾何学(石畳)文	幾何学(石畳)文	南蛮唐草文
	脚部地文様	橘樹文	桔梗・橘樹文	橘樹文	橘樹文	秋草文
	脚部縁取り線 下位充填文様	複線 幾何学(石畳)文	複線 幾何学(七宝繫)文	二重線 幾何学(石畳)文	二重線 幾何学(七宝繫)文	単線 南蛮唐草文
背 面	上部地文様	桔梗・橘樹文	橘樹文	橘樹文	橘樹文	楓樹文
	脚部地文様	朝顔文	橘樹文	葛唐草文	葛唐草文	葛唐草文
	縁辺文様	南蛮唐草文	南蛮唐草文	南蛮唐草文	南蛮唐草文	南蛮唐草文
	脚部縁取り線 下位充填文様	なし	なし	なし	なし	単線 南蛮唐草文

(2) 格狭間(脚部)縁取り線の由来・意味と書見台4基の年代

ところで、これら4基の書見台をもっとも特徴づけているのは、脚部表面の格狭間に沿って蒔絵線や螺鈿で描かれている二重の縁取り線である(図3、図37~40各左)¹⁵。註12の拙論(以下「前稿」と表記)執筆時にはまだ広島県美および聖カタリーナ教会書見台の存在を知らず、また東博およびヴァリャドリド博書見台の格狭間縁取り線についても特に意識していなかったが、その後広島県美書見台の調査を行うことなどによって東博書見台との共通性を見だし、



図37 広島県立美術館所蔵南蛮漆器書見台の格狭間(左:表面・右:背面)

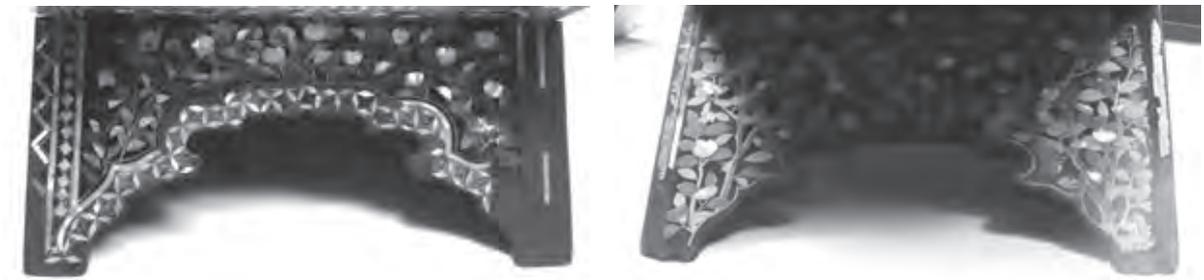


図38 東京国立博物館所蔵南蛮漆器書見台の格狭間(左:表面・右:背面)

15 ただし、聖カタリーナ教会書見台のみ、この縁取り線最下部の屈折部が下(内)向きとなっており、他の三基とは逆であるが、その理由ははっきりしない。

また本稿を記述するにあたって過去の調査データを再確認したことや、直近に聖カタリーナ教会でその書見台を実見できたこともあって、この縁取り線の存在と意味について検討する必要性を認識するに至ったものである。

この縁取り線は、これら書見台の格狭間形状に類似してはいるものの完全には一致せず、実際には長く横（内側）に飛び出す鉤状部が縁取り線では小さな突起となり、そこから大きく上方に湾曲するという点が特徴的な形状差となっている。こうした縁取り線の形からして、この線もやはり格狭間形を示しているのではないかと推測したくなるが、管見の限り、これまでこうした縁取り線と同じ格狭間形を持つ書見台作例は知られていない¹⁶。また図37、38、39、40の各右に示したように、これら書見台の背面脚部にはいずれも縁取り線が表されていないことも留意すべき点かと思われる。

さて、これら4基の書見台よりも古手と筆者が考えているスペイン、メディナ・デル・カンポ所在のアウグスチン教会（＝聖マリア・マグダレーナ教会）所蔵「鉄線蒔絵螺鈿書見台」（図41、ヴァリャドリド東洋博物館寄託品、以下、アウグスチン教会書見台と表記）にも脚部の表裏両面に同様の縁取り線が確認されるため（図42）¹⁷、これを併せた5基の書見台文様をどのように理解するのが問題となる。このアウグスチン教会の書見台は筆者の年代観では三期区分

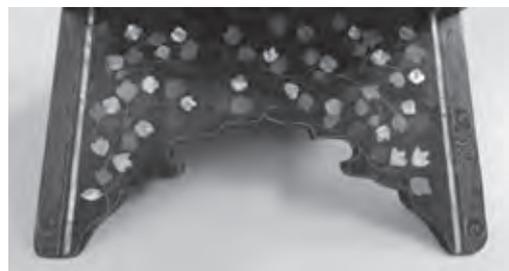


図39 聖カタリーナ教会所蔵南蛮漆器書見台の格狭間（左：表面、右：背面）



図40 ヴァリャドリド博物館所蔵南蛮漆器書見台の格狭間（左：表面・右：背面）

16 ポルトガル北部のブラガ大聖堂に伝世する南蛮漆器書見台には現状この縁取り線と同じ形態の格狭間形が確認できるが、2023年1月に行った実見調査の結果、理由や時期は不明ながら、この鉤状突起左右両面4か所すべてが欠失したための類似であることが判明した。

17 本書見台は、註12小林論文表1、南蛮漆器および類南蛮漆器書見台一覧表のNo.33である。なおこの論文では名称に誤認があったため、本稿で「鉄線蒔絵螺鈿書見台」に訂正しておきたい。本書見台の実見調査は寄託先であるヴァリャドリド東洋博物館で2014年7月9日に実施した。



図41 スペイン、メディナ・デル・カンポ、アウグスチン教会所蔵南蛮漆器「鉄線蒔絵螺鈿書見台」(左：表面、右：背面)



図42 アウグスチン教会所蔵南蛮漆器書見台の格狭間(左：表面、右：背面)

中のⅡ期前半であり、Ⅲ期とする上記表1①～④の4基の書見台縁取り線の初現的存在である可能性がある。その脚部格狭間形縁取り線は蒔絵で表されているが、それは細い一本線であり、上記書見台4基のそれが太く幅を持つ複線で表されているのと比べると、アウグスチン教会書見台縁取り線の存在感はかなり弱く感じる。またアウグスチン教会書見台では縁取り線の下位を蒔絵の南蛮唐草で埋めているが、4基の書見台では螺鈿も混じえたより幅広い幾何学文帯とされていることも同様の印象を強めている。一方で、①～④の4基の書見台では表面のみのこの脚部縁取り線がアウグスチン教会書見台では背面にも表されていることは興味深く(図42右)、アウグスチン書見台に見られるように、もともと脚部両外面の装飾として誕生した文様が、後に形骸化・形式化して表面にだけ表わされるようになったものという解釈が導かれるのかもしれない。とはいえ、現在50基ほどが遺存する南蛮漆器書見台のなかで、こうした脚部格狭間の縁取り線を表す作例が5基に過ぎないという数の少なさは、この表現がどの程度一般的な存在であったのかという点で疑念を感じさせ、単なる装飾表現という理解を定着させるには

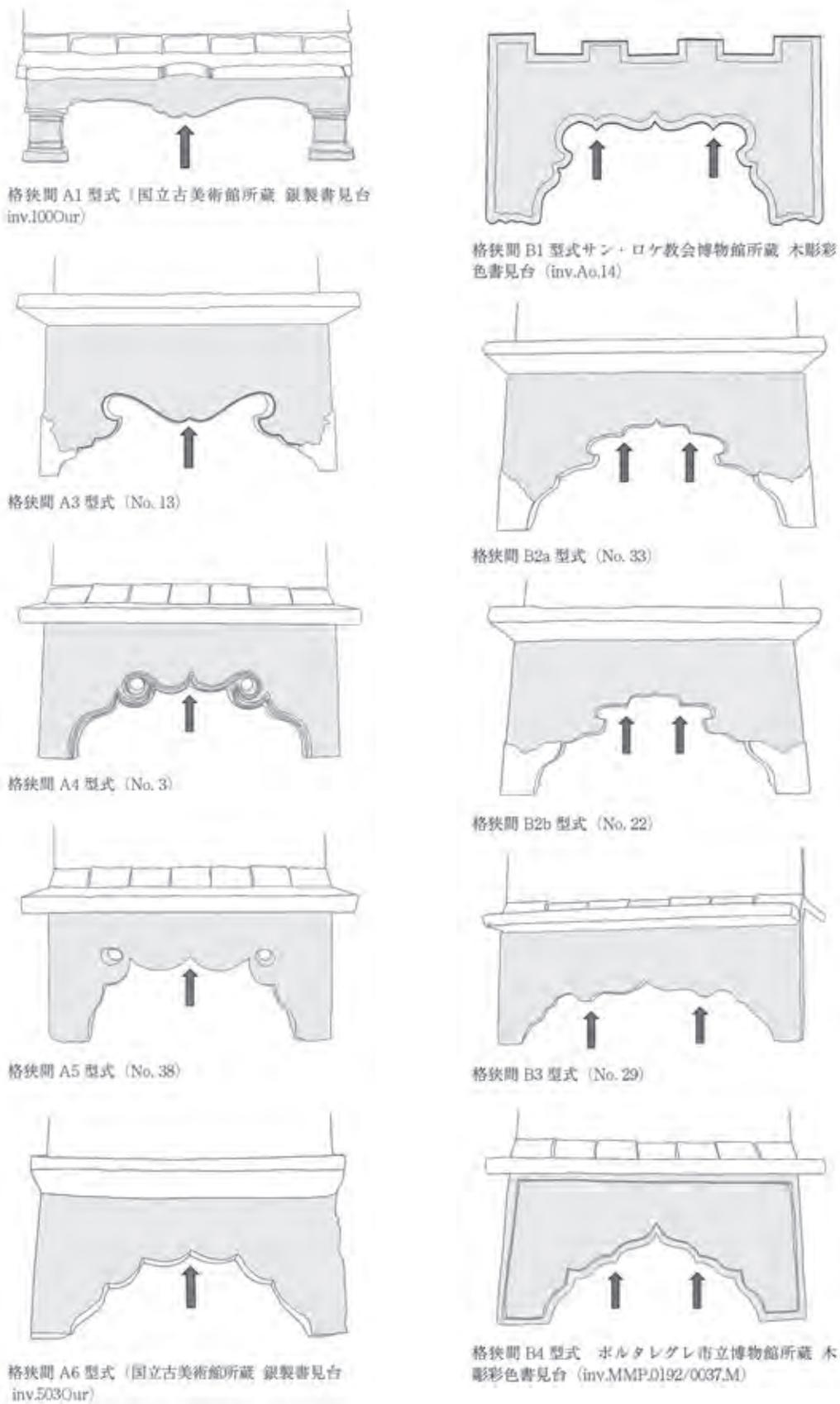


図43 南蛮漆器類書見台格狭間の想定型式組列 (左：A形式、右：B形式、註12小林2016挿図2・7)



図44 リスボン、サン・ロケ教会博物館所蔵木彫彩色書見台
(サン・ロケ教会博物館提供)



図45 ポルトガル、ポルタレグレ市立博物館所蔵木彫彩色書見台

さらなる類例の増加が必要なようにも思われる。

ところで、筆者はかつて南蛮漆器書見台の編年について検討した際に、その格狭間形をA形式とB形式の大きく二種に分類し、その形式組列についての想定案を提示したことがある(図43)¹⁸。このA形式とは、主に中国南部沿岸地域で使われ発展したと見られる格狭間形で、脚部の屈曲が繋がって孔となり(図43、格狭間A4型式)、以後次第に形骸化して消滅していく過程をたどる(図43、格狭間A6型式)。一方B形式は、日本で造られた南蛮漆器書見台のほとんどに認められる格狭間形式であり、本章で検討する5基の書見台はいずれもこのうちのB2型式に分類される。この形式はポルトガルでインド・ポルトガル様式に分類されている図43、格狭間B1型式のリスボン、サン・ロケ教会博物館所蔵「木彫彩色書見台」(図44、所蔵品番号A0.14)から派生したものとみられ、その後、格狭間B2型式、そして格狭間B3型式である所在不明の彩色幾何学文類南蛮漆器書見台を経て、やはりインド・ポルトガル様式の図43、格狭間B4型式のポルトガル、ポルタレグレ市立博物館所蔵「木彫彩色書見台」(図45、所蔵品番号MMP.0192/0037.M)への変化を遂げると理解していたところであった。

また、このB形式の格狭間形がどのように生まれたのか、という問題はこの時代に日本での器物製作に影響を与えた由来地とも関係する問題でもあるものの、今なお確かな根拠を持ち得ていないが、所蔵館によって16世紀後半から末に位置づけられているオスマン・トルコ時代調

18 註12文献、挿図2・7、および47-48ページ参照。

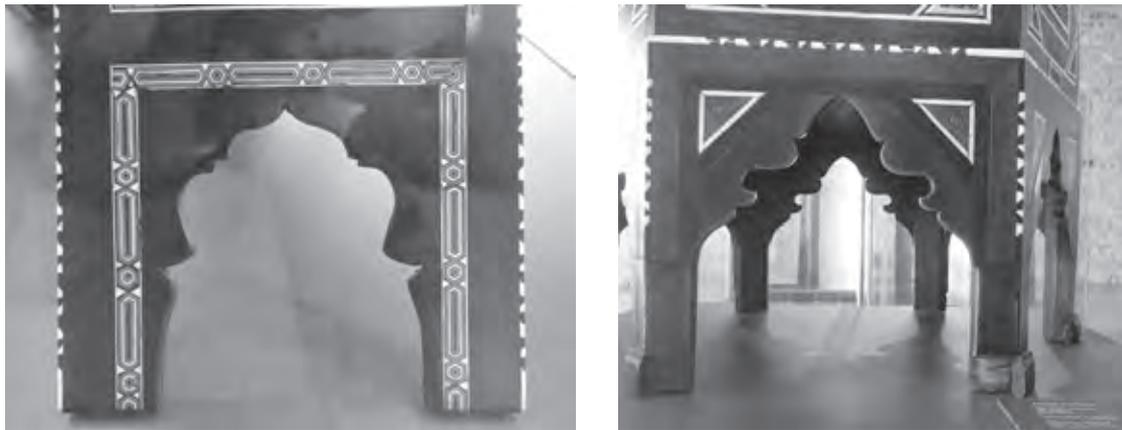


図46 イスタンブール、トルコ・イスラム美術館所蔵調度品の格狭間形
 (左：コーラン書見台・16世紀後半、右：キャビネット・16世紀末)

度品の脚部格狭間形にもよく似た形態が確認され(図46)¹⁹、両者間に直接、間接かはさておき、何らかの影響関係が存在した可能性を想定すべきなのかもしれない。もしこのB形式格狭間もどこからかの外来的な影響で造られたのだとすれば、A形式格狭間を持つ書見台とは異なる成立経緯が存在した可能性も推測され、これらの格狭間形の系譜についても今後検討を進める必要があるだろう。

では、これら4基の書見台製作実年代はいつ頃とみるべきであろうか。前稿において筆者は東博書見台とヴァリヤドリド博書見台を第Ⅲ期に含めたが、これは南蛮漆器書見台、また南蛮漆器全体の流れの中で、縁辺文様が南蛮唐草から幾何学文へと移行し、また地文様としても幾何学文が優勢となって行くという趨勢の理解により判断したものであった。一方で、広島県美書見台は表面上半部の地文(図1)は幾何学文様ではなく花卉文であり、より古様なあり方と言えるが、架台端部や他部位文様との共通性からすれば、アウグスチン教会書見台を除くこれら4基の書見台はおおよそ同じ時期に製作されたものとみて大過ないと推察できるであろう。

Ⅲ期の実年代については、Ⅱ期後半としたイタリア、ロレートのサンタ・カーザ所蔵南蛮漆器「IHS萩蒔絵螺鈿書見台」(図47)が1633年7月4日に初めて収蔵品記録にその存在が確認されるので、後続するⅢ期の年代を1640年代前後と理解したのであるが²⁰、この点については現在も具体的に年代を判断する材料がなく、本稿でもこの年代観を踏襲し、表1①～④の書見台4基

19 トルコ、イスタンブールのトルコ・イスラム美術館所蔵コーラン書見台(所蔵品番号127)、およびキャビネット(所蔵品番号5)。

20 小山真由美『南蛮漆器考一天正・慶長遣欧使節の時代の遺品と記録』中央公論美術出版、2019年、97-121ページ。また筆者は、何らかの明確な根拠がない限り、製作年代とそれが収蔵地に移動するまで間に物理的に必要な時間以上の時間差を想定していない。

の製作年代は1630年代から1640年にかけての頃であったと推測しておきたい。

(3) 一枚板造り南蛮漆器書見台の木地板製作地について

第2章のCT結果報告で明らかにされたように、広島県美・東博両書見台はこれまでに筆者らがCT調査を実施した南蛮文化館所蔵書見台2基の分析結果と同様²¹、一枚の厚い板目板の上下から縦方向に切断分割して製作された一枚板造りであることが判明した。このことは南蛮漆器書見台の製作においてこうした方法が一般的になされていたものであった蓋然性をさらに高めるものと言える。

しかし一方で、こうした書見台の木地は海外で生産して日本に持ち込み、装飾だけを国内で行ったという見方もあるようである。だが、端喰という反り止めを目的としたとみられる棒板の背板頂部への取り付け、また口絵8を始めとする日本製の南蛮漆器書見台(図34-36左、図41左)には認められるが、類南蛮漆器(図48)など国外製と考えられる書見台の木地板には認められない、おそらく内丸鉤による架台端部縁辺の曲面仕上げなど、日本製南蛮漆器書見台のみに確認される独自の入念な加工は²²、もし海外からの輸入書見台木地板に蒔絵螺鈿装飾のみを行って製品化するだけならば特段行う必要もない作業である。さらにまた、日本での端喰追加による背板縦長の長大化を避けようとする、海外での木地板生産時に日本への輸出用書見台にだけ背板を寸詰まり状態に仕上げていることになり、こうした非効率的な造り分けをあえて採用していたことを認める必要が生じる。あるいは、類南蛮漆器で主流のA形式格狭間形と日本製南蛮漆器に圧倒的なB形式格狭間形とに造り分けた理由説明の困難さ、このほかにも、いつ注文されるか分からない日本での書見台需要のために海外で木地板を造らせて持ち運んだという仮定の設



図47 イタリア、ロレート、サンタ・カーザ所蔵南蛮漆器「IHS蒔絵螺鈿細書見台」(小山真由美氏撮影)

21 註1、および註7文献参照。

22 1603-04年に長崎で刊行された『日葡辞書』には7種類もの鉤が採録されているが、その一つに「Sauogana. サウガナ(棹鉤) 大工が木をなめらかに削るのに使う長い刃物」が、またさらに「Tocuri. トクリ(とくり) 大工の鉤の役をする或る種の細長い刃物であって、Sauogana(棹鉤)と呼ばれるものよりも小さいもの」があり(土井忠生ほか訳『邦訳 日葡辞書』岩波書店、1980年、562・654ページ)、これが内丸鉤に相当するのかもしれない。註1文献の註42、25ページも参照。

定が必要になること、さらに個々の書見台に見られる法量差や、上記のような南蛮漆器と類南蛮漆器間に認められる微妙な縁辺形状の違いといった点は、書見台発注に備えて国内外いずれでも木地板をあらかじめ一括生産しストックしていたといった見方に否定的な特徴だと言え、この時期の細工用小形縦挽き鋸の出現可能性なども併せて考えると²³、何種類かのキリスト教器物、あるいは南蛮漆器全体の中で、書見台に対してのみ海外での木地制作とその輸入を考える必然性は低いと言わざるを得ないように思う²⁴。実見調査を行う中で日本製南蛮漆器書見台の多くに共通して観察される木目の通った特徴的な木材利用と、そこから予測される南蛮漆器と類南蛮漆器書見台との使用材の違い、さらにはその樹種分析により木材産地判断がなされればより客観的な根拠が得られることになるだろうが、一枚板造りという日本国内にはない技術で造られた書見台に対し、聖龕や聖餅箱などのキリスト教具に対しては国内伝統の技術で製作するといった多様な技術対応のあり方は²⁵、未知の西洋器物の製作注文に対しても、個別の工夫で日本国内でも十分に対応できていた蓋然性を示すものであり、当時の国内技術水準や対応能力を殊更に低く見積もる必然性はないということを強調しておきたいと思う²⁶。



(小林)

図48 南蛮文化館所蔵類南蛮漆器
「IHS木彫箔絵螺細書見台」
(南蛮文化館提供)

おわりに

平成12年の書見台修復終了時から記録を残しておきたいと思いつつも機会がないまま20年余を経て、積年の思いが叶った。小林氏には今回の調査を発案いただいた結果、安藤氏には書見台のCT調査を、鳥越氏と宮田氏には当館蔵品と近似する東京国立博物館蔵書見台のCT調査結果をご披露いただいたことで、当研究紀要では稀な他館研究者との共同執筆として報告するこ

23 註1文献参照。

24 さらに、中国南部沿海地域での装飾と考えられる「類南蛮漆器」書見台には木彫装飾を持つものがあり、それらについてはインドでの木地製作可能性も想定される。つまり、一口に国外製といってもその木地板製作地の判断は単純ではなく、安易な想定は許されない状況にあることも踏まえておく必要があるだろう。

25 註1文献による聖餅箱の調査結果。また別途実施している聖龕のCT調査結果からも、その製作は一般的な指物師の技術で可能である。

26 第3章挿図の画像については、キャプションに提供者名があるもの以外はすべて小林が撮影したものである。

とができた。

数ある南蛮漆器の中で、当館が所蔵するのは本報告の主役である書見台、そして大筆筒の2点である。形態も文様構成も異なる大筆筒については研究の余地はまだ大きい。

今回の報告を作成する中で、書見台の修復の背景に松平不昧公の白絲威鎧修復事業がイメージされていたことを今回初めて聞き、当時の担当学芸員が壮大な構想を抱いていたことに感慨を覚えた。また、当時、新人学芸員だった筆者は修復の現場を訪問しているのだが、漆工と修復の一端を垣間見る機会に恵まれたことは幸いだったと思い返している。なお、平成12年の修復時に後補された螺鈿の位置(図13、14)は初公表であることを強調しておく。

第2章の奈良国立博物館の大型文化財用CT装置による調査は当該書見台にとって初めてのCT調査であり、各部の木目から一枚材から切り抜いて作られた一枚板造り構造であること、外見からは知ることができない金釘様の釘で別材を固定していたことなどが明らかとなり、画像分析による成果は大きかった。さらに、広葉樹あるいは針葉樹といった樹種の同定については今後の検討課題としたい。第3章で小林氏は文様と形態からの視点で5基の書見台を比較され、当館蔵書見台との類似作例について詳細に述べられている。

ところで筆者(福田)は、キリスト教書見台の一枚板造り構造の製作技法のルーツとコーラン用の書見台の構造が近似していることにも関心を持ってきた。当館は中央アジアの染織品とジュエリーを多数所蔵していることもあり、自費による現地訪問を重ねてきた中で、ウズベキスタンの書見台製作を実見したことがある。この地域の書見台の形態は、南蛮漆器の書見台とは少々異なるが、鋸を使って切り抜いて(切り分けて)交差する可動式の2面を作る一枚板造り構造であり²⁷、可動部の形状は近いように思われる。この製作技法についてはいずれ別稿で詳しく報告したい。イスラムの聖典コーランの書見台と、南蛮漆器の書見台の繋がりについての可能性を述べることは尚早なのは承知しているものの、製作技法と左右の向きが前後に90度回転した形態の成り立ちに今後も着目していきたい。

美術館にとって所蔵品の調査研究は重要な責務の一つであり、今回のように外部専門家の方々が加わってさまざまな観点からひとつの作品を調査研究することができたのは当館にとって誠に幸いであった。共同執筆の関係者には心より感謝している。一方で、当該書見台の研究は完結したのではなく、内外の学芸員や研究者の方々によるさらなる調査研究に期待したい。

(福田)

27 福田浩子「中央アジアの美術工芸について—旧ソ連領中央アジアを中心に—」『平成12-15年度科学研究費補助金[基盤研究(B)(1)]研究成果報告書 アジアの藝術思想の解明—比較美学的観点からの研究—』2004年、129-140ページ。

謝辞

本報告の作成にあたっては、元当館次長村上勇氏、中村信一氏には多大な協力をいただいた。また、リスボンの聖カタリーナ教会所蔵書見台調査では同教会Jorge Anselmo神父、ヴァリャドリド博物館所蔵書見台調査ではEloisa Watternberg館長（当時）、アウグスチン教会所蔵書見台調査ではヴァリャドリド東洋博物館のBlas Sierra de la Calle神父、ブラガ大聖堂伝世書見台調査では同教会Fernanda Barbosa氏にそれぞれご理解ご尽力をいただき、サン・ロケ教会博物館所蔵木彫彩色書見台画像は同館João Miguel Simões氏から提供いただいた。さらにまた、東京国立博物館所蔵書見台の検討に関しては同館猪熊兼樹、福島修両氏のご教示を得た。末筆ながらお名前を記して心より感謝申し上げます。

なお、本調査結果は小林を研究代表者とする科学研究費補助金基盤研究(A)「アジア螺鈿文化交流史の構築—物質文化史の視点から」(研究課題番号：20H00037)による成果の一部である。

執筆者

福田 浩子（ふくだひろこ／広島県立美術館学芸課長）

岡地 智子（おかしさとこ／広島県立美術館学芸課学芸員）

小林 公治（こばやしこうじ／東京文化財研究所特任研究員）

安藤真理子（あんどまりこ／奈良国立博物館学芸部保存修理指導室研究員）

鳥越 俊行（とりごえとしゆき／東京国立博物館学芸研究部保存修復課調査分析室長）

宮田 将寛（みやたまさひろ／東京国立博物館学芸研究部保存修復課調査分析室専門職）

BULLETIN
OF
HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM

No.26

On the Artists Who Painted Shukkeien in the Edo Period

(1) 54

SUMIKAWA Akihiro

Report on the Nanban Lacquer Lectern in the Collection of the Hiroshima Prefectural Art Museum -through Comparison with the Results of the CT Survey of the Nanban Lacquer Lectern in the Tokyo National Museum Collection.

(54) 1

**FUKUDA Hiroko, OKAJI Satoko, KOBAYASHI Koji, ANDO Mariko,
TORIGOE Toshiyuki, MIYATA Masahiro**

2023

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM
HIROSHIMA JAPAN

広島県立美術館 研究紀要 第26号
BULLETIN OF HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM No.26

発行日 令和5(2023)年3月24日
編集・発行 広島県立美術館
Hiroshima Prefectural Art Museum
〒730-0014 広島市中区上鞆町2-22
2-22 Kaminobori-cho Naka-ku Hiroshima City 730-0014 JAPAN
Tel. 082-221-6246 Fax. 082-223-1444
印刷 株式会社 タカトープリントメディア